

修士論文（要旨）

2012年1月

初対面二者間会話におけるスピーチレベルシフトとその指標的意味

指導 宮副ウォン裕子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

210J3005

篠崎佳恵

目次

用語の定義	1
第1章 はじめに	2
1.1 研究の背景	2
1.2 研究の目的	2
1.3 本論文の構成	2
第2章 先行研究	4
2.1 母語場面のスピーチレベルシフトに関する先行研究	4
2.2 接触場面のスピーチレベルシフトに関する先行研究	5
2.3 指標性に関する先行研究	5
2.4 本研究の位置づけ	8
第3章 調査概要	9
3.1 調査協力者	9
3.2 調査方法	9
第4章 分析方法	11
4.1 文字化の基準	11
4.2 スピーチレベルの分類基準	11
4.3 スピーチレベルの判定基準詳細	12
第5章 分析	14
5.1 グローバル分析	14
5.2 ローカル分析	19
第6章 総合的考察	40
6.1 普通体の指標的意味について	40
6.1.1 普通体の unmarked use と marked use	40
6.1.2 普通体の unmarked use/marked use と相手の印象の関連	41
6.1.3 接触場面におけるアイデンティティ「共同作業者」について	42
6.2 母語場面と接触場面における規範の相違について	43
6.2.1 スピーチレベルの選択と聞き手の評価	43
6.2.2 心的距離の見積もり	44
第7章 まとめと今後の課題	46
参考文献	a
添付資料1：インタビューシート	i
添付資料2：同意書	ii
添付資料3：文字化資料	iii

キーワード【スピーチレベルシフト 接触場面 指標性 タスク 言語の社会化】

要旨

日本語学習者にとって、日本語の丁寧体と普通体の使い分け、すなわちスピーチレベルシフト（以下、SL シフト）の習得は特に難しいと言われている。そのため、これまで母語場面や接触場面の談話を対象として、SL シフトの機能や、学習者の特徴を明らかにする多くの研究がなされてきた。しかしながら、大部分の研究は初対面の 1 回の接触のみを対象としており、時の経過につれて変化する人間関係の実態を考察した実証的研究の蓄積は乏しい。加えて、これまでの研究では Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論を基に、SL シフトを「ポライトネス・ストラテジー」として一面的に捉えたものが多く、SL シフトの多様性・多義性を十分に説明できとは言えない。この解明のために、本研究では新しいアプローチとして指標性の概念を用いた。本研究は、母語場面および接触場面の同年代初対面二者間会話における SL シフトに着目し、その指標的意味を明らかにすることを目的とする。

Cook (2008) では、ウチの関係にある会話参加者間の談話で用いられる丁寧体に着目し、その指標的意味を考察している。その結果、丁寧体は「Self-presentational Stance (姿勢を正す)」を直接指標し、それがウチの文脈で用いられる場合は、「責任者」「知識がある者」「遊び」など様々な社会的アイデンティティやアクティビティを間接的に指標することを明らかにした。その上で、言語形式が指標する意味を社会的文脈に照らして理解することが、コミュニケーション能力を向上させる上で非常に重要だとしている。本研究は Cook (前掲書) の考察結果に基づき、初対面会話で用いられる普通体の指標的意味を明らかにしようとするものである。

本研究で使用したデータは、稿者が収集した母語場面 3 組、接触場面 3 組、各 4 回分の準自然談話と、その文字化資料、およびフォローアップインタビューである。調査協力者は 20~30 代の日本人 9 名、中国人 3 名（日本語上級）であった。自然な会話を持続させるため、「短期留学生のためのパンフレットを作る」という作業を 1 対 1 でしてもらい、その様子を録画、録音した。

分析方法としては、各ペアのスピーチレベルの比率および変遷を量的に明らかにするグローバル分析と、個々の発話に着目して動的かつ相互構築的な指標的意味を質的に明らかにしていくローカル分析の 2 種を行った。グローバル分析の結果、母語場面においては同年代の初対面会話で丁寧体を基本レベルとすることが規範と考えられていること、2 者間のスピーチレベルは全体的にほぼ相似をなすこと等がわかった。接触場面においては、日本語母語話者が普通体、非母語話者が丁寧体を基本レベルとした不均衡な状態で会話を進めたペアが多かったこと等が明らかになった。ローカル分析では、普通体の直接的指標を聞き手への意識が低くなる「off-stage」の情意的スタンスと捉えて分析を行なった。母語場面では 1) 独り言、2) 感嘆、3) 引用、4) 共同作業者などのアクトやアイデンティティが、普通体により間接的に指標されていることがわかった。接触場面では、これらに加え、5) 母語話者支援者のアイデンティティも観察された。これらの例から、普通体と「心的距離」・「上下関係」を直接的に結びつけることはできず、普通体は実際の談話において社会的文脈に応じた多様な指標的意味を持っていることが示された。

総合的考察では、初対面場面における普通体の使用には上記 1) ~5) のように「心的距離」や「上下関係」に直接寄与しない unmarked use と、それ以外の marked use があることを示した。unmarked use/ marked use の比率は会話参加者の互いの印象に影響を与えており、これを考慮に

入れることで、SL の変遷および人間関係の変化について、より深い理解が可能になることが明らかになった。

また、本研究の談話収集において内容重視のタスクを取り入れたことで、アイデンティティの交渉過程を観察することが出来た。接触場面においては、「日本語母語話者」対「非母語話者」という二項対立的な立場と、それに相対する対等な「共同作業者」という立場を、会話参加者が動的かつ双方向的に構築していたのである。このことから、教室授業にタスクを取り入れる有用性も示唆された。

最後に、母語場面と接触場面では、SL の選択に対する評価や心的距離の見積もりにおいて、差異があることがわかった。相互行為の前提となる共通の規範が存在しない接触場面においては、指標性の解釈も母語場面とは異なる。これが、母語場面と異なる結果をもたらしたと考えられる。

参考文献

- 生田少子・井出祥子(1983)「社会言語学における談話研究」『月刊言語』 Vol.12, No.12, 77-84.
- 伊集院郁子(2004)「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』第6巻第2号, 12-26.
- 宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662号, 27-42.
- 宇佐美まゆみ(2001)「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想」『談話のポライトネス』pp.9-58 国立国語研究所.
- 宇佐美まゆみ(2007)『改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版』宇佐美まゆみ研究室 (<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj070331.pdf>) (2011年6月20日)
- 岡本能里子(1997)「教室談話における文体シフトの指標的機能—丁寧体と普通体の使い分け—」『日本語学』16(3); 39-51.
- 上仲淳(2007)「中国語を母語とする上級日本語学習者のスピーチレベルの選択基準」『大阪大学言語文化学』Vol.16,141-154.
- 久保田賢一 (2000)『構成主義パラダイムと学習環境デザイン』関西大学出版部.
- 陳文敏(2000)「日本語母語話者の会話に見られる「中途終了型」発話—表現形式及びその生起の理由—」『言葉と文化』第1号,125-142.
- 陳文敏(2004)「台湾人上級日本語学習者の初対面接触会話におけるスピーチレベル・シフト—日本語母語話者同士による会話との比較—」『日本語教育論集』20, pp.18-33 国立国語研究所
- 中山晶子(2003)『親しさのコミュニケーション』くろしお出版
- ネウストプニー, J. V. (1981)「外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』45, 30-40.
- ネウストプニー, J. V. (1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店.
- 三牧陽子(2002)「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に—」『社会言語科学』第5巻第1号, 56-74.
- 三牧陽子(2007)「文体差と日本語教育」『日本語教育』134号, 58-67.
- 山下仁(2006)「ポライトネス研究における自明性の破壊にむけて」ましこ・ひでのり編著『ことば／権力／差別—言語権からみた情報弱者の解放』pp.165-191 三元社.
- 吉川友子(2009)「「異文化交流」の実際—滞日留学生と日本人の相互行為分析から」野呂香代子・山下仁編著『新装版「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み—』pp.183-214 三元社.
- Brown, P. and Levinson, S. (1987). *Politeness : Some universals in language usage*. Second edition. Cambridge University Press.
- Cook, H. M. (2008). *Socializing Identities through speech style*. Buffalo: Multilingual Matters.
- Ochs, E. (1988). *Culture and language development: Language acquisition and language socialization in a Samoan village*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ochs, E. (1996). "Linguistic Resources for Socializing Humanity," In J. J. Gumperz and S. C. Levinson (eds.), *Rethinking Linguistic Relativity* (pp.407-437) Cambridge: Cambridge University Press.
- Schieffelin, B. and Ochs, E (1986). "Language Socialization," *Annual Review of Anthropology* 15, 163-191.